

東海道五十三次

岡本かの子

青空文庫

風俗史專攻の主人が、殊に昔の旅行の風俗や習慣に興味を向け
 て、東海道に探査の足を踏み出したのはまだ大正も初めの一高の
 生徒時代だったという。私はその時分のことは知らないが大学時
 代の主人が屢々そこへ行くことは確に見ていたし、一度などは
 私と一緒に連れて行つて貰った。念の爲め主人と私の關係を話し
 て置くと、私の父は幼時に維新の匆騷を越えて来たアマチュア
 の有職故実家であつたが、斯道に熱心で、研究の手傳けのため
 一人娘の私に絵画を習わせた。私は十六七の頃にはもう濃く礮水
 をひいた薄美濃紙を宛てがつて絵巻物の断片を臆き写しすること
 も出来たし、残存の兜の鍔を、比較を間違えず写生することも出

来た。だが、自分の独創で何か一枚画を描いてみようとなるとそれは出来なかった。

主人は父の邸^{やしき}へ出入りする唯一の青年といつてよかつた。他に父が交際している人も無いことはなかつたが、みな中年以上か老人であつた。その頃は「成功」なぞという言葉が特に取出されて流行し、娘たちはハイカラ^{まげ}鬚という洋髪を結^ゆっている時代で虫食いの図書遺品を漁^{あさ}るといふのはよくよく向きの変つた青年に違ひなかつた。けれども父は

「近頃、珍らしい感心な青年だ」と褒^ほめた。

主人は地方の零^{れいらく}落した旧家の三男で、学途には就いたものの、学費^{なにかば}の半以上は自分で都合しなければならなかつた。主人は、好

きな道を役立てて歌舞伎の小道具方の相談相手になり、デパートの飾人形の衣裳を考証してやつたり、それ等から得る多少の報酬で学費を補っていた。かなり生活は苦しそうだったが、服装はきちんとしていた。

「折角せつかくの学問の才を切れ端にして使い散らさないように——」

と始終忠告していた父が、その実意からしても死ぬ少し前、主人を養子に引取って永年苦心の蒐しゅう集しゅう品と、助手の私を主人に譲ったのは道理である。

私が主人に連れられて東海道を始めてみたのは結婚の相談が纏まとまっまて間もない頃である。

今まで友だち附合いの青年を、急に夫として眺めることは少し

窮屈で擦こばゆい気もしたが、私には前から幾分そういう予感が無いわけでもなかった。狭い職分や交際範囲の中に同じような空気を呼吸して来た若い男女が、どのみち一組になりそうなことは池の中の魚のように本能的に感じられるものである。私は照れるようなこともなく言葉もそう改めず、この旅でも、ただ身のまわりの世話ぐらいは少し遠慮を除けてしてあげるぐらいなものであった。

私たちは静岡駅で夜行汽車を降くだりた。すぐ駅の俵くろまを雇やつて町中を曳ひかれて行くと、ほのぼの明けの靄もやの中から大きな山葵漬わさびの看板たいや鯛たいのでんぶの看板がのそつと額の上に現われて来る。旅慣れない私はこころの弾はむ思しいがあつた。

まだ、戸の閉っている二軒のあべ川餅屋もちやの前を通ると直ぐ川瀬の音に狭霧さぎりを立てて安倍川が流れている。轍わだちに踏まれて躍る橋板の上を曳かれて行くと、夜行で寝不足の瞼まぶたが涼しく拭われる気持がする。

町ともつかず村ともつかない鄙ひなびた家並がある。ここは重衡しげひらの東下りのとき、鎌倉で重衡に愛された遊女千手せんじゆの前の生れた手越たごしの里だという。重衡、斬られて後、千手は尼となって善光寺に入り、歿したときは二十四歳。こういう由緒を簡単に、主人は前の俵から話し送って呉れる。そういえば山門を向き合つて双方名灸きゆうしよ所と札をかけている寺など何となく古雅なものに見られるような気がして来た私は、氣を利きかして距離を縮めてゆるゆる

走つて呉れる俤の上から訊^きく。

「むかしの遊女はよく貞操的な恋愛をしたんですわね」

「みんなが、みんなそうでもあるまいが、——その時分に貴賓^{きひん}の前に出るような遊女になると相当生活の独立性が保てたし、一つは年齢の若い遊女にそういうロマンスが多いですね」

「じゃ、千手もまだ重衡^{はつこう}の薄倖^{はくしやう}な運命に同情できるみずみずしい情緒のある年頃だったというわけね」

「それにね、当時の鎌倉というものは新興都市には違いないが、何といつても田舎で文化に就^つては何かと京都をあこがれている。

三代の实^{さねとも}朝時代になつてもまだそんなふうだったから、この時代の鎌倉の千手の前が都会風の洗練された若い公達^{きんだち}に会つて参

ったのだろうし、多少はそういう公達を恋の目標にすることに自分自身誇りを感じたのじゃないでしょうか」

私はもう一度、何となく手越の里を振返った。

私と主人はこういう情愛に關係する話はお互いの間は勿論、もちろん

現代の出来事を話題としても決して話したことはない。そういうことに触れるのは私たちのような好古家の古典的な家庭の空気を吸って来たものに取っては、生々しくて、或る程度の嫌味にさえ感じた。ただ歴史の事柄を通しては、こういう風にたまには語り合うことはあつた。それが二人の間に幾らか温かい親しみを感じさせた。

如何いかにも街道という感じのする古木の松並木が続く。それが尽

きるとぼつと明るくなって、丸い丘が幾つも在る間の開けた田畑の中の道を俵は速力を出した。小さい流れに板橋の架かっている橋のたもとの右側に茶店風の藁屋わらやの前で俵は梶棒おろを卸した。

「はい。丸子へ参りました」

なるほど障子しょうじに名物とろろ汁、と書いてある。

「腹が減つたでしょう。ちよつと待つてらつしやい」

そういつて主人は障子を開けて中へ入つた。

それは多分、四月も末か、五月に入つたとしたら、まだいくらかも経たない時分と記憶する。

静岡辺は暖かいからというので私は薄着の綿入れで写生帳とコートは手に持っていた。そこら辺りにやしおの花が鮮あざやかに咲き、丸

味のある丘には一面茶の木が鶯うぐいすもち餅もちを並べたように萌黄もえぎの新芽で装われ、大気の中にまでほのぼのとした匂いを漂わしていた。

私たちは奥座敷といっても奈良漬色の畳にがたがた障子の嵌はまつている部屋で永い間とろろ汁が出来るのを待たされた。少し細目ろうおに開けた障子の隙間から畑を越して平凡な裏山が覗かれる。老鶯ろうおが鳴く。丸子の宿の名物とろろ汁の店といってももうそれを

食べる人は少ないので、店はただの腰掛け飯屋になっているらしく耕地測量の一行らしい器械たずさを携えた三四名と、表に馬を繋いだ馬子まごとが、消し残しの朝の電燈の下で高笑いを混えながら食事をしている。

主人は私に退屈させまいとして懐ふところから東海道分間図ぶんま絵を出して

頁をへぐつて説明して呉れたりした。地図と鳥瞰図ちようかんずの合の子のようなもので、平面的に書き込んである里程や距離を胸に入れながら、自分の立つ位置から右に左に見ゆる見当のまま、山や神社仏閣や城が、およそその見ゆる形に側面の略図を描いてある。勿論、改良美濃紙の復刻本であつたが、原図の菱川師宣ひしかわもろのぶのあの暢艶ちようえんで素雅な趣おもむきはちりりちりり味えた。しかし、自然の実感というものは全くなかつた。

「昔の人間は必要から直接に発明したから、こんな便利で面白いものが出来たんですね。つまり観念的な理窟に義理立てしなかつたから——今でもこういうものを作つたら便利だと思ふんだが」

はじめ、かなり私への心遣こころづかいで話しかけているつもりでも、

いつの間にか自分独りだけで古典思慕に入り込んだ独り言ひとごとになっている。好古家の学者に有り勝ちなこの癖を始終私は父に見ているのであまり怪しまなかつたけれども、二人で始めての旅で、殊にこういう場所で待たされつつあるときの相手の態度としては、寂しいものがあつた。私は氣を紛まぎらすために障子を少し開けひろげた。

午前の陽は流石さすがに眩まぶしく美しかった。老婢が「とろろ汁が出来ました」と運んで来た。別に変つた作り方でもなかつたが、炊たき立ての麦飯の香ばしい湯氣に神仙の土のような匂いのする自然じねんじ薯よは落ち付いたおいしさがあつた。私は香りを消さぬように薬味の青海苔のりを撒ふらずに碗わんを重ねた。

主人は給仕をする老婢に「皆川老人は」「ふじのや連は」「齒磨き屋は」「彦七は」と妙なことを訊き出した。老婢はそれに対して、消息を知っているのもあるし知らないのもあった。話の様子では、この街道を通りつけの諸職業の旅人であるらしかった。主人が「作樂井さくらいさんは」と訊くと

「あら、いま、さきがた、この前を通つて行かれました。あなた等も峠とうげへかかられるなら、どこかでお逢いになりましたう」

と答えた。主人は

「峠へかかるにはかかるが、廻り道をするから——なに、それに別に会い度たいというわけでもないし」

と話を打ち切った。

私たちが店を出るときに、主人は私に「この東海道には東海道人種とでも名付くべき面白い人間が沢山たくさんいるんですよ」と説明を補足した。

細道の左右に叢々たる竹藪が多くなつてやがて、二つの小峯が目近く聳そびえ出した。天柱山に吐月峰とげつぼうというのだと主人が説明した。私の父は潔癖家で、毎朝、自分の使うたばこぼん 盆の灰吹を私に掃除させるのに、灰吹の筒の口に素地きじの目が新しく肌を現すまでといし 砥石の裏に何度も水を流しては擦すらせた。朝の早い父親は、私が眠い目を我慢して砥石で擦こつて持つて行く灰吹を、座敷に坐り煙き管せるを膝に構えたまま、黙つて待つてゐる。私は気が気でなく急いで持つて行くと、父は眉しわを皺しわめて、私に戻す。私はまた擦り直す。

その時逆にした灰吹の口に近く指に当たるところに磨滅した烙印らくいんで吐月峰と捺おしてあるのがいつも眼についた。春の陽ざしが麗うららかに拡がった空のような色をした竹の皮膚にのんきに据すわっているこの意味の判らない書体を不機嫌な私は憎らしく思った。

灰吹の口が奇麗に擦れて父の氣に入ったときは、父は有難うと言つてそれを蓑盆にさし込み、煙管を燻くゆらしながら言つた。

「おかげでおいしい朝の煙草が一服吸える」

父はそこで私に珍らしく微笑ほほえみかけるのであつた。

母の歿したのちは男の手一つで女中や婆あやや書生を使い、私を育てて来た父には生甲斐いきがいとして考証詮索の楽しみ以外には無いように見えたが、やはり寂しいらしかつた。だが、情愛の発露の

道を知らない昔人はどうにも仕方なかったらしい。掃き清めた朝の座敷で幽寂閑雅な気分に入る。それが唯一の自分の心を開く道で、この機会に於てのみ娘に対しても素直な愛情を示す微笑も洩^もらせた。私は物どころについてから父を憐れなものに思い出して来て、出来るだけ灰吹を奇麗に掃除してあげること努めた。そして灰吹に烙印してある吐月峰という文字にも、何かそういった憐れな人間の息抜きをする意味のものが含まれているのではないかなと思うようになった。

父は私と主人との結婚話が決まると、その日から灰吹掃除を書生に代ってやらせた。私は物足らなく感じて「してあげますわ」と言っても「まあいい」と言ってもどうしてもやらせなかった。参

考の写生や縮写もやらせなくなつた。恐らく、娘はもう養子のも
のと譲つた気持ちからであらう。私は昔風な父のあまりに律儀な
意地強さにちよつと暗^{あん}涙^{るい}を催したのであつた。

まわりの円味がかつた平凡な地形に対して天柱山と吐月峰は突^と
兀^{つこつ}として秀でている。けれども矗^{ちく}とか峻^{しゅん}とかいう峙^{そばだ}ちようでは
なく、どこまでも撫^なで肩^{がた}の柔かい線である。この不自然さが二峰
を人工の庭の山のように見せ、その下のところに在る藁^{わら}葺^{ぶき}の草
堂^{もろとも}諸^{もろとも}共、一幅の絵になつて段々近づいて来る。

柴の門を入ると瀟^{しょう}洒^{しや}とした庭があつて、寺と茶室と折^{せつちゆ}
衷^うしたような家の入口にさびた聯^{れん}がかかっている。聯の句は

幾若葉はやし初の園の竹

山桜思ふ色添ふ霞かすみかな

主人は案内を知っていると見え、柴折戸しおりどを開けて中庭へ私を導き、そこから声をかけながら庵いおりの中に入った。一室には灰吹を造りつつある道具や竹材が散らばっているだけで人はいなかった。

主人は関わらずに中へ通り、棚に並べてある宝物に向つて、私にこれを写生しとき給えと命じた。それは一休の持ったという鉄鉢てつぱと、頓阿弥とんあみの作つたという人丸の木像であつた。

私が、矢立やたての筆を動かしていると、主人はそこらに転がついた出来損じの新らしい灰吹を持って来て巻煙草を燻らしながら、ぽつぽつ話をする。

この庵の創始者の宗そうちよう長は、連歌は宗祇そうぎの弟子で禅は一休に学んだというが、連歌師としての方が有名である。もと、これから三つ上の宿の島田の生れなので、晩年、斎藤加賀守の庇護ひごを受け、京から東に移った。そしてここに住みついた。庭は銀閣寺のものを小規模ながら写してあるといった。

「室町も末になって、乱世の間に連歌なんという閑文字が弄もてあそばれたということも面白いことですが、これが東国の武士の間に流行はやったのは妙ですよ。都から連歌師が下つて来ると、最寄もより々々の城から招いて連歌一座所望したとか、発句ほく一首ぜひとか、而しかもそれがあす合戦に出かける前日に城内から所望されたなどという連歌師の書いた旅行記がありますよ。日本人は風雅に対して何か特

別の魂を持ってるんじゃないかな」

連歌師の中にはまた職掌しよくしようを利用して京都方面から関東へのスパイや連絡係を勤めたものもあったというから幾分その方の用事もあったには違いないが、太田道灌どうかんはじめ東国の城主たちは熱心な風雅擁護者で、従って東海道の風物はかなり連歌師の文章で当時の状況が遺のこされていると主人は語った。

私はそれよりも宗長という連歌師が東国の広漠たる自然の中に下つてもなお廃残の京都の文化を忘れ兼ね、やつとこの上かみがた方の自然に似た二つの小峰を見つけ出してその蔭に小さな蝸牛かたつむりのような生活を営んだことを考えてみた。少女の未練のようなものを感じていじらしかった。で、立去り際にもう一度、銀閣寺うつ

しという庭から天柱、吐月の二峰をよく眺め上げようと思った。

主人は新らしい灰吹の中へなにがしかの志の金を入れて、工作部屋の入口の敷居に置き

「万事灰吹で間に合せて行く。これが禅とか風雅というものかな」と言つて笑つた。

「さあ、これからが宇津うつの谷峠や。業平なりひらの、駿河するがなるうつの山辺のうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり、あの昔の宇都の山ですね。登りは少し骨が折れましょう。持ちものはこっちへお出なさい。持つててあげますから」

鉄道の隧道すいどうが通つていて、折柄、通りかかった汽車に一度現代の煙を吐きかけられた以後は、全く時代とは絶縁された峠の旧

道である。左右から木立の茂った山の崖裾の間をくねって通って行く道は、ときどき梢の葉の密閉を受け、行手が小暗くなる。そういうところへ来ると空気はひやりとして、右側に趨はしっている瀬川の音が急に音を高めて来る。何とも知れない鳥の声が、瀬戸物の破片を擦り合すような鋭い叫声を立てている。

私は芝居で見る黙阿弥もくあみ作の「薦紅葉つたもみじうつ宇都谷峠のやとうげ」のあの文弥殺しの場面を憶い起して、婚約中の男女の初旅にしては主人はあまりに甘くない舞台を選んだものだ。私は少し脅おびえながら主人のあとについて行つた。

主人はときどき立停まつて「これどきなさい」と洋傘で弾ねている。大きな墓かまが横腹の辺に朽葉を貼りつけて眼の先に蹲うすくまっている。

る。私は脅えの中にも主人がこの旧峠道にかかつてから別人のよ
うに快活になつて顔も生々して来たのに氣付かないわけには行か
なかつた。洋傘を振り腕を拡げて手に触れる熊笹をむし筆むしつて行く。
それは少年のような身軽さでもあり、自分の持地に入つた園主の
ような氣儘きままさでもある。そしてときどき私に

「いいでしょう、東海道は」

と同感を強いた。私は

「まあね」と答えるより仕方がなかつた。

ふと、私は古典に浸る人間には、どこかその中からロマンチッ
クなものを求める本能があるのではあるまいかなど考えた。あん
まり突如として入つた別天地に私は草臥くたびれるのも忘れて、ただ、

せつせと主人について歩いて行くうちどのくらいたつたか、ここが峠だという展望のある平地へ出て、家が二三軒ある。

「十団子とおだごも小粒になりぬ秋の風という許きよろく六の句にあるその十とおだ団子んどを、もとの辺で売ってたのだが」

主人はそう言いながら、一軒の駄菓子ものを並べて草鞋わらじなど吊つてある店先へ私を休ませた。

私たちがおかみさんの運んで来た渋茶を飲んでみると、古障子ごごろを開けて呉紹ごごろの羽織を着た中老の男が出て来て声をかけた。

「いよう、珍らしいところで逢った」

「や、作楽井さくらいさんか、まだこの辺にいたのかね。もつとも、さつき丸子では峠にかかっているとは聞いたが」

と主人は応^{こた}える。

「坂の途中で、江尻へ忘れて来た仕事のこと思い出してさ。帰らなきやなるまい。いま、奥で一ぱい飲みながら考えていたところさ」

中老の男はじろじろ私を見るので主人は正直に私の身元を紹介した。中老の男は私には丁^{ていねい}寧に

「自分も絵の端くれを描きますが、いや、その他、何やかや八百屋でして」

男はちよつと軒端^{のきば}から空を見上げたが

「どうだ、日もまだ丁度ぐらいだ。奥で僕と一ぱいやつてかんかね。昼飯も食うてつたらどうです」

と案内顔に奥へ入りかけた。主人は青年ながら家で父と晩酌を飲む口なので、私の顔をちよつと見た。私は作楽井というこの男の人なつかしそうな眼元を見ると、反対するのが悪いような気がしたので

「私は構いませんわ」と言つた。

粗壁の田舎家の奥座敷で主人と中老の男の盃の献酬がはじまる。裏の障子を開けた外は重なった峯の岨そばが見開きになって、その間から遠州の平野が見晴せるのだろうが濃い霞が濺よどんでかかり、金色にやや透けているのは菜の花畑らしい。覗きに來る子供を叱りながらおかみさんが幹あっせん旋する。私はどこまで旧時代の底に沈ませられて行くか多少の不安と同時に、これより落着きようもない

静な氣分に魅せられて、傍で茹で卵など剥むいていた。

「この間、島田で、大井川の川越しに使った蓮台を持つてる家を見付けた。あんたに逢ったら教えて上げようと思つて——」

それから、酒店のしるしとして古風に杉の玉を軒に吊っている家が、まだ一軒石部の宿に残っていることや、お伊勢参りの風俗や道中唄なら関の宿の古老に頼めば知つていて教えて呉れることだの、主人の研究の資料になりそうなことを助言していたが、私の退屈にも氣を配つたと見え

「奥さん、この東海道というところは一度や二度来てみるのは珍らしくて目保養にもなつていいですが、うっかり嵌はまり込んだら抜けられませんぜ。氣をつけなさいまし」

嵌り込んだら最後、まるで飴あめにかかった蟻あめのようになるのであると言った。

「そう言っちゃ悪いが、御主人なぞもだいぶ足を粘り取られてる方だが」

酒は好きだがそう強くはない性質らしく、男おとこは赭あかい顔に何とな
く感情を流露りゅうろうさす声になった。

「この東海道というものは山や川や海がうまく配置され、それに宿々ぐあいがいい工合くあいな距離に在って、景色からいっても旅の面白味からいっても滅多に無い道筋だと思うのですが、しかしそれより自分自分は五十三次が出来た慶長頃から、つまり二百七十年ばかりの間に幾百万人の通った人間が、旅というもので嘗なめる寂しみや幾ら

かの気散じや、そういったものが街道の土にも松並木にも宿々の家にも浸み込んでいるものがある。その味が自分たちのような、情味に脆い性質の人間を痺らせるのだろうと思いますよ」

強いて同感を求めるような語気でもないから、私は何とも返事しようがない気持ちをただ微笑に現して頷いてだけいた。すると作樂井は独り感に入つたように首を振つて

「御主人は、よく知つてらつしやるが、考えてみれば自分なぞは

――

と言つて、身の上話を始めるのであつた。

家は小田原在に在る穀物商で、妻も娶り兄妹三四人の子供もできただが、三十四の歳にふと商用で東海道へ足を踏み出したの

が病みつきであつた。それから、家に腰が落着かなくなつた。この宿を朝立ちして、晩はあの宿に着こう。その間の孤独で動いて行く氣持、前に発^たつた宿には生涯二度と戻るときはなく、行き着く先の宿は自分の目的の唯一のものに思われる。およそ旅というものにはこうした氣持は附きものだが、この東海道ほどその感を深くさせる道筋はないと言うのである。それは何度通つても新しい風物と新らしい感慨にいつも自分を浸すのであつた。ここから東の方だけ言つても

程ヶ谷と戸塚の間の焼餅坂に権太坂

箱根旧街道

鈴川、松並木の左富士

この宇津の谷

こういう場所は殊にしみじみさせる。西の方には尚多いと言つた。

それに不思議なことはこの東海道には、京へ上るといふ目的意識が今もつて旅人に働き、泊り重ねて大津へ着くまでは緊張していて常にうれしいものである。だが、大津へ着いたときには力が落ちる。自分たちのような用事もないものが京都へ上つたとて何になろう。

そこで、また、汽車で品川へ戻り、そこから道中すごろく双六のよう
に一足一足、上りに向つて足を踏み出すのである。何の為に？
目的を持つ為めに。これを近頃の言葉では何というのでしょうか

か。憧憬、なるほど、その憧憬を作るために。

自分が再々家を空けるので、妻は愛想を尽かしたのも無理はない。妻は子供を連れたまま実家へ引取った。実家は熱田附近だが、そう困る家でもないのです、心配はしないようなものの、流石にと^{さすが}きどきは子供に学費ぐらいは送ってやらなければならぬ。

作樂井は器用な男だったので、表具やちよつとした建具左官の仕事は出来る。自分で襖を^{ふすま}張り替えてそれに書や画もかく。こんなことを生業^{なりわい}として宿々に知り合いが出来るとなおこの街道から脱けられなくなり、家を離散してから二十年近くも東海道を住家として上り下りしていると語った。

「こういう人間は私一人じゃありませんよ。お仲間がだいぶあり

ますね」

やがて

「これから大井川あたりまでご一緒に連れ立って、奥さんを案内してあげたいんだが何しろ忘れて来た用事というのが壁の仕事でね、乾き工合もあるので、これから帰りましょう。まあ、御主人がついてらっしゃれば、たいがいの様子はご存じですから」

私たちは簡単な食事をしたのち、作楽井と西と東に訣れた。^{わか}暗い隧道がどこかに在ったように思う。

私たちはそれから峠^{とうげ}を下った。軒の幅の広い脊の低い家が並んでいる岡部の宿へ出た。茶どきと見え青い茶が乾してあつたり、茶師の赤銅色の裸体が^{くす}燻んだ色の町に目立っていた。私たちは藤

枝の宿で、熊谷蓮生坊が念仏を抵当に入れたというその相手の長者の邸跡が今は水田になっていて、早苗がさなえやさしく風に吹かれているのを見に寄ったり、島田では作樂井の教えて呉れた川越しの蓮台を蔵している家を探ねて、それを写生したりして、大井川の堤に出た。見晴らす広漠とした河原に石と砂との無限の展望。初夏の明るい陽射しも消し尽せぬ人間の憂愁の数々に思われる。堤が一髪を横たえたように見える。ここで名代なのは朝顔眼あきの松で、二本になっている。私たちはその夜、島田から汽車で東京へ帰った。

結婚後も主人は度々たびたび東海道へ出向いた中に私も二度ほど連れ

て行つて貰つた。

もうその時は私も形^{なり}振^{ふり}は関わず、ただ燻んでひやりと冷たいあの街道の空氣に浸り度い心が急^せいた。私も街道に取憑^{とりつ}かれたのであるうか。そんなに寂^{さび}れていながらあの街道には、蔭に賑やかなものが潜んでいるようにも感じられた。

一度は藤川から出発し岡崎で藤吉郎の矢矧^{やはぎ}の橋を見物し、池鯉^{ちり}鮒^うの町はずれに在る八つ橋の古趾を探ねようというのであつた。

大根の花も莢^{さや}になつてゐる時分であつた。

そこはやや湿地がかつた平野で、田圃^{たんぼ}と多少の高低のある沢地がだるく入り混つてゐた。畦川が流れていて、濁つた水に一ひらの板橋がかかつてゐた。悲しいくらい周囲は眼^{まなこ}を遮^{さへぎ}るものもない。

土地より高く河が流れているらしく、やや高い堤の上に点を打つたように枝葉を刈り込まれた松並木が見えるだけであつた。「ここを写生しとき給え」と主人が言うので、私は矢立を取出したが、標本的の画ばかり描いている私にはこの自然も蒔まき絵えの模様のようにしか写されないので途中で止めてしまった。

三河と美濃の国境だという境橋を渡つて、道はだんだん丘陵の間に入り、この辺が桶狭間おけはざまの古戦場だという田圃みちを通つた。戦場にしては案外狭く感じた。

鳴海なるみはもう名物の絞りを売っている店は一二軒しかない。並んでいる邸宅風の家々はむかし鳴海絞りを売つて儲けた家だと俵夫しやふが言つた。池鯉鮒はふよりで気の付いたことには、家の造りが破風を

前にして東京育ちの私には横を前にして建ててあるように見えた。
主人は

「この辺から伊勢造りになるんです」
と言った。その日私たちは熱田から東京に帰った。

木枯しの身は竹斎に似たるかな

十一月も末だったので主人は東京を出がけに、こんな句を口くちず
誦さんだ。それは何ですと私が訊くと

「東海道遍歴体小説の古いものの一つに竹斎物語というのがある
んだよ。竹斎というのは小説の主人公の藪医者の名さ。それを芭
蕉が使って吟じたのだな。確か芭蕉だと思った」

「では私たちは男竹斎に女竹斎ですか」

「まあ、そんなところだろう」

私たちの結婚も昂揚時代というものを見ないで、平々淡々の夫婦生活に入っていた。父はこのときもう死んでいた。

そのときの目的は鈴鹿を越してみようということであつた。亀山まで汽車で来て、それから例の通り俤に乗った。枯桑の中に石垣の膚を聳え^{そび}立たしている亀山の城。関のさびれた町に入つて主人は作樂井が昨年話して呉れた古老を尋ね、話を聞きながらそこに持ち合っている伊勢詣りの浅黄^{あさぎ}の脚絆^{きやはん}や道中差しなど私に写生させた。福蔵寺に小まんの墓。

関の小まんが米かす音は一里聞えて二里響く。

仇打あだうちの志があつた美女の小まんはまた大力でもあつたのでこのうういう唄が残つていゝといつた。

関の地藏尊に詣でて、私たちは峠にかかつた。

満目しゆくさつ 肅しゆくさつ 殺ころの氣に充ちて旅のうら寂しさが骨身に徹る。

「あれが野猿の声だ」

主人はにこにこして私に耳を傾けさした。私はまたしてもこういうところへ来ると生々して来る主人を見て浦山うらやましくなつた。

「ありたけの魂をすっかり投げ出して、どうでもして下さいと言いたくなるような寂しさですね」

「この底に、ある力強いものがあるんだが、まあ君は女だからね」小唄に残つていゝ間あいの土山つちやまへひよっこり出る。屋根附の中風

藥の金看板なぞ見える小さな町だが、今までの寒山枯木に対して、血の通う人間に逢う歡びは覺える。

風が鳴っている三上山の麓ふもとを車行して、水無口から石部の宿を通る。なるほど此処ここの酒店で、作樂井が言つたように杉の葉を玉に丸めてその下に旗を下げた看板を軒先に出している家がある。主人は仰いで「はあ、これが酒店のしるしだな」と言つた。

琵琶湖の水が高い河になつて流れる下を隧道に掘つて通つてい
る道を過ぎて私たちは草津のうばが餅屋に駆け込んだ。硝子戸ガラスの
中は茶釜ちやがまをかけた竈かまどの火で暖かく、窓の色硝子の光線をうけて
鉢の金魚は鱗を七彩に閃めかしながら泳いでいる。外を覗いてみ
ると比良も比叡も遠く雪雲を冠っている。

「この次は大津、次は京都で、作楽井に言わせると、もう東海道でも上りの憧憬の力が弱まっている宿々だ」

主人は餅を食べながら笑って言った。私は

「作楽井さんは、この頃でも何処かを歩いてらっしゃるでしょうか、こういう寒空にも」

と言つて、漂浪者の身の上を想つてみた。

それから二十年余り経つ。私は主人と一緒に名古屋へ行つた。

主人はそこに出来た博物館の頼まれ仕事で、私はまた、その学校へ赴任している主人の弟子の若い教師の新家庭を見舞うために。その後の私たちの経過を述べると極めて平凡なものであった。

主人は大学を出ると美術工芸学校やその他二三の勤め先が出来た上、類の少ない学問筋なので何やかや世間から相談をかけられることも多く、忙しいまま、東海道行きは、間もなく中絶してしまつた。ただときどき小夜の中山を越して日坂の蕨餅わらびもちを食つてみたいとか、御油、赤阪の間の松並木の街道を歩いてみたいとか、うわごと譫言のように言っていたが、その度もだんだん少なくなつて、

最近では東海道にいくらか縁のあるのは何か手の込んだ調べものがあると、蒲郡がまごおりの旅館へ一週間か十日行つて、その間、必要品を整えるため急いで豊橋へ出てみるぐらいなものである。

私はまた、子供たちも出来てしまつてからは、それどころの話でなく、標本の写生も、別に女子美術出の人を雇つて貰つて、私

はすっかり主婦の役に髪を振り乱してしまった。ただ私が今も残念に思っていることは、絵は写すことばかりして、自分の思ったことが描けなかったことである。子供の中の一人で音楽好きの男の子があるのを幸いに、これ作曲家に仕立てて、優劣は別としても兎に角、自分の胸から出るものを思うまま表現できる人間を一人作り度いと骨折っているのである。

さてそんなことで、主人も私も東海道のことはすっかり忘れ果て、二人ともめいめいの用向きに没頭して、名古屋での仕事もほぼ片付いた晩に私たちはホテルの部屋で番茶を取り寄せながら雑談していた。するとふと主人は、こんなことを言い出した。

「どうだ、二人で旅へ出ることも滅多にない。一日帰りを延して

久し振りにどっか近くの東海道でも歩いてみようじゃないか」

私は、はじめ何をこの忙しい中に主人が言うのかと問題にしないつもりでいたが、考えてみると、もうこの先、いつの日に、いつまた来られる旅かと思うと、主人の言葉に動かされて来た。

「そうですね。じゃ、まあ、ほんとに久し振りに行ってみましようか」

と答えた。そう言いかけていると私は初恋の話をするように身の内の熱くなるのを感じて来た。初恋もない身で、初恋の場所でもないところの想い出に向って、それは妙であった。私たちは翌朝汽車で桑名へ向うことにした。

朝、ホテルを出発しようとする、主人に訪問客があつた。小松という名刺を見て主人は心当りがなく、ボーイにもう一度身元を聞かせた。するとボーイは

「何でもむかし東海道でよくお目にかかった作楽井の息子と言え
ばお判りでしょうと仰おつしやいます」

主人は部屋へ通すように命じて私に言つた。

「おい、むかしあの宇津で君も会つたろう。あの作楽井の息子だ
そう。苗字は違つてゐるがね」

入つて来たのは洋服の服装をきちんとした壮年の紳士であつた。
私は殆ど忘れて思ひ出せなかつたが、あの作楽井氏のひと懐なつつこ
い眼元がこの紳士にもあるような気がした。紳士は丁寧に礼をし

て、自分がこの土地の鉄道関係の会社に勤めて技師をしているということから、昨晚、倶楽部へ行つてふと、亡父が死前に始終その名を口にしていたその人が先頃からこの地へ来てNホテルに泊っていることを聴いたので、早速訪ねて来た顛^{てんまつ}末^{まつ}を簡潔に述べた。小松というのは母方の実家の姓だと言った。彼は次男なので、その方に子が無いまま実家の後を嗣^ついだのであった。

「すると作楽井さんは、もうお歿^なくなりになりましたか。それはそれは。だが、年齢から言つてもだいぶにおなりだったでしょうからな」

「はあ、生きておれば七十を越えますが、一昨年歿^なくなりました。七八年前まで元気でおりまして、相変らず東海道を往来しており

ましたが、神経痛が出ましたので流石さすがの父も、我を折って私の家へ落着きました」

小松技師の家は熱田に近い処に在った。そこからは腰の痛みの軽い日は、杖つえに縋すがりながらも、笠寺観音から、あの附近に断続して残っている低い家並に松株が挟まっている旧街道の面影を尋ねて歩いた。これが作楽井をして小田原から横浜市に移住した長男の家にかかるよりも熱田住みの次男の家へかからしめた理由なのであった。

「私もときどき父に附添って歩くうちに、どうやら東海道の面白い味を覚えました。この頃は休暇毎には必ず道筋のどこかへ出かけるようにしております」

小松技師は作楽井氏に就いていろいろのことを話した。作楽井氏も晩年には東海道ではちよつと名の売れた画家になつて表具や建具仕事はしなくなつたことや、私の主人に、まだその後街道筋で見付けた参考になりそうな事物を教えようとして作楽井氏が帳面につけたものがあるから、それをいずれは東京の方へ送り届けようということや、作楽井氏の腰の神経痛がひどくなつて床についてから同じ街道の漂泊人仲間を追憶したが、遂に終りをよくしたものが無い中にも、私の主人だけは狡くて、途中に街道から足を抜いたため、珍らしく出世したと述懐していたことやを述べて主人を散々に苦笑させた。話はつい永くなつて十時頃になつてしまつた。

小松技師は帰りしなに、少し改つて

「実はお願いがあつて参りましたのですが」

と言つて、暫く黙つていたが、主人が気さくな顔をして応^うじているのを見て安心して言つた。

「私もいささかこの東海道を研究してみましたのですが、御承知の通り、こんなに自然の変化も都会や宿村の生活も、名所や旧蹟も、うまく配合されている道筋はあまり他にはないと思うのです。で、もしこれに手を加えて遺すべきものは遺し、新しく加うべき利便はこれを加えたなら、将来、見事な日本の一大観光道筋になるうと思います。この仕事はどうも私には荷が勝つた仕事ですが、いずれ勤先とも話がつきましたら専心この計画にかかつて私の生

涯の事業にしたいと思ひますので」

その節は、亡父の誼よしもあり、東海道愛好者としても呉々くれぐれも一臂いつびの力を添えるよう主人に今から頼んで置くのであつた。

主人が「及ばずながら」と引受けると、人懐しきつこい眼を輝かしながら頻りに感謝の言葉を述べるのであつた。そして、これから私たちの行先が桑名見物というのを聞取つて

「あすこなら、私よく存じている者もありますから、御便宜になるよう直ぐ電話で申送つて置きましょう」

と言つて歸つて行つた。

小松技師が歸つたあと、しばらく腕組をして考えていた主人は、私に言つた。

「憧憬という中身は変わらないが、親と子とはその求め方の方法が違つて来るね。やっぱり時代だね」

主人のこの言葉によつて私は、二十何年か前、作楽井氏が常に希望を持つために、憧憬を新らしくする為に東海道を天津まで上つては、また、発足点へ戻つてこれを繰返すという話を思い出した。私は

「やっぱり血筋ですかね。それとも人間はそんなものでしょうか」と、言つた。

汽車の窓から伊勢路の山々が見え出した。冬近い野は農家の軒のまわりにも、田の畦あぜにも大根が一ぱい干されている。空は玻璃はり

のように澄み切って陽は照っている。

私は身体を車体に揺られながら自分のような平凡に過した半生の中にも二十年となれば何かその中に、大まかに脈をうつものが氣付かれるような氣のするのを感じていた。それはたいして縁もない他人の脈ともどこかで触れ合いながら。私は作楽井とその息子の時代と、私の父と私たちと私たちの息子の時代のことを考えながら急ぐ心もなく桑名に向っていた。主人は快げに居眠りをしている。少し見え出したつむじの白髪が弾ねて光る。

青空文庫情報

底本：「岡本かの子全集」ちくま文庫、筑摩書房

1993（平成5）年8月24日第1刷発行

底本の親本：「第六創作集『老妓抄』」中央公論社

1939（昭和14）年3月18日

初出：「新日本」

1938（昭和13）年8月号

入力：佐藤洋之

校正：高橋真也

1999年2月6日公開

2005年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

東海道五十三次

岡本かの子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>